九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

黄庭堅と「竹枝詞」

蒙, 顕鵬
九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1792145

出版情報：中国文学論集. 45, pp.75-90, 2016-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

黄庭堅と「竹枝詞」

蒙　顕　鵬

一　黄庭堅の左遷と竹枝詞

紹聖元年（一〇九四）、黄庭堅は『神宗実録』[1]において新法を非難した罪で、涪州別駕・黔州安置を命じられた。十二月に都開封に近い陳留を出発、翌紹聖二年四月、兄の黄大臨とともに黔州（現重慶市彭水県）に到着した。その途中、彼は「竹枝詞」を二首創作している。「竹枝詞」はまたの名を「竹枝歌」とも称し、その詩型は七言絶句に近く民歌を模した詩体である。唐代から宋代にかけてこの歌謡の創作範囲は、四川省を下り、江南地方にまで及ぶ長江流域と推定されている。[2]

撐崖拄谷蝮蛇愁　入箐攀天猿掉頭
鬼門關外莫言遠　五十三驛是皇州

崖に撐へ谷に拄へ　蝮蛇も愁ふ、箐に入り天に攀じ　猿も頭を掉る。
鬼門関外　遠しと言ふ莫かれ、五十三駅　是れ皇州。

浮雲一百八盤縈　落日四十八渡明
鬼門關外莫言遠　四海一家皆弟兄

浮雲　一百八盤に縈ひ、落日　四十八渡に明らかなり。
鬼門関外　遠しと言ふ莫かれ、四海一家　皆弟兄。

（「竹枝詞二首」『山谷詩集注』[3]巻十二）

崖や谷の峻険さは蛇の愁いを誘い、森林は天に届くほどに密生し、猿も恐怖のあまりに首を振ってしまう。この鬼門関の道のりが遠いことを言わないでほしい、京都までは五十三駅しかないのだから、と詩人は慰めている。黄

庭堅兄弟は首都と一〇〇〇キロメートル以上離れた黔州に赴いたわけであり、慰めの言葉の中に無力感が漂うのは已むを得ないことであろう。第二首は途中通過した辺鄙な場所として一百八盤（湖北恩施市南陵県南陵山中に地名が残る）及び四十八渡（現重慶市南川馬嘴山付近）の浮雲と落日を描写する。これは、李白の「浮雲遊子の意、落日故人の情」（「送友人」）を踏まえ、漂泊と離別の情を表現している。第三句は前詩の第三句を踏襲し、第四句は「君子敬しみて失無く、人に与し、恭しくして礼有らば、四海の内、皆兄弟と為るなり。君子何ぞ兄弟無きを患へんや」という『論語』顔淵篇の言葉を引用して、私は遠い黔州に左遷されても、きっと現地の人々は私を兄弟として付き合ってくれるだろうから、心配は要らないと兄を慰めている。

なお、この「竹枝詞」二首には注意すべきところがいくつかある。まずはその地名の多用である。第一首には蛇倒退・胡孫愁・鬼門関、第二首に一百八盤・四十八渡・鬼門関の計五つ[4]が確認できる。これは恐らく彼らの実際の行程を反映したものであろう。黄庭堅はこの旅路を回想した文章を九年後の崇寧元年（一一〇二）に残している。

初元明自陳留出尉氏、許昌、渡漢、江陵上夔峽、過一百八盤、渉四十八渡、送余安置于摩圍山之下。淹留數月不忍別、士大夫共慰勉之、乃肯行。

初め元明、陳留より尉氏、許昌を出で、漢を渡り、江陵より夔峽を上り、一百八盤を過ぎ、四十八渡を渉り、余の摩囲山の下に安置せらるるを送る。淹留すること数月、別るるに忍びず、士大夫と共に慰めてこれを勉ましし、乃ち行くことを肯ず。（「書萍鄉縣廳記」『黄庭堅全集』正集巻二十）

文中では兄弟二人の苛刻な道程がつぶさに描かれている。到着後、兄は数ヶ月黔州に滞在し、黄庭堅と別離を惜しみ、周りの士士大夫たちから慰められてようやく帰途に立ったという。

一方、地名は同時に双関語（いわゆる掛詞）としても使われている。「撑崖拄谷蝮蛇愁」が三峽の地名であると同時に「蝮蛇も愁う」ほど険しい場所という意味を含んでいるほか、「入箐攀天猿掉頭」の「猿も首を回す」ほど高いという発想もまた三峽の地名の「胡孫愁」から導き出されたものである。さらに「鬼門関」は、伝説上命を失う場所とされる鬼門を連想させる。竹枝詞では現地の地名を用いることがしばしば用いられるが、その地名が持つ字面上の意味を作品中に反映させる点は黄庭堅のくふうと言えるだろう。なお、双関語の巧みな例として劉禹錫「竹枝

詞」の「東邊日出西邊雨、道是無晴却有晴（東辺日出でて西辺雨ふり、道ふならく是れ晴れ無きも却て晴れ有り）[5]」がよく挙げられるが、黄庭堅も双関語を多用している。

黄庭堅は、この「竹枝詞」二首を作ってまもなく、夢の世界で大詩人の李白と出会い、李白から口述で三首の「竹枝詞」を教えられたという。

予既作竹枝詞、夜宿歌羅驛、夢李白相見於山間曰、予往謫夜郎、於此聞杜鵑、作竹枝詞三疊、世傳之不。子細憶集中無有、請三誦乃得之。

予既に「竹枝詞」を作り、夜に歌羅駅に宿す、夢に李白と山間に相見えて曰く、「予往て夜郎に謫せられ、此に於て杜鵑を聞き、「竹枝詞」三畳を作る。世に之を伝ふや否や。」子細に集中に有る無しを憶ひ、三誦せんことを請うて乃ち之を得たり。

（『山谷詩集注』巻十二）

この長い文章が、夢中に李白より授けられた竹枝詞三首に着想を得た作品の詩題である。「夢中得句」の詩句の所有権について浅見洋二氏に専論があり[6]、この作品は黄庭堅本人の作品として認めてよいのか微妙な問題があるが、ここではひとまずこの三首の詩を黄庭堅自身の作品として取り扱う。其の一を見てみよう。

一聲望帝花片飛　萬里明妃雪打圍　　一声の望帝　花片飛ぶ、万里の明妃　雪に打囲す。
馬上胡兒那解聽　琵琶應道不如歸　　馬上の胡児　那んぞ聴くことを解せん、琵琶応に不如帰と道ふべし。

遠い蕃夷の地へ追放された主人公（李白も黄庭堅も）は、都から万里の彼方で匈奴と結婚した王昭君を連想するのである。望帝はホトトギスの別名で、その声は「不如帰去（帰るに如かず）」と鳴くとされ、宋代の詩歌ではよく故郷を思う隠喩として取り込まれる[7]。一方、望帝は「皇帝を望む」という字面上の意味も含んだ双関語であり、都（皇城）を連想させやすい。詩の大意は、王昭君がホトトギスの声「不如帰去」を聞き、望郷の念に惹かれて、琵琶の音に郷愁を託すが、匈奴の人は野蛮なので、その意味を理解できない、という。次に其の二はどうであろうか。

竹竿坡面蛇倒退　摩圍山腰胡孫愁　　竹竿の坡面　蛇倒退し、摩囲の山腰　胡孫愁ふ。
杜鵑無血可續淚　何日金雞赦九州　　杜鵑　血の涙を続く可き無し、何れの日か金鶏　九州に赦されん。

一・二句は竹竿坡・蛇倒退・摩囲山（現重慶市彭水縣にある）・胡孫愁という四つの地名を詠み込んでいる。蛇倒

退・胡孫愁は前述のように双関語であり、三峡の険しい地形を表現する。三・四句は李白の「我愁遠謫夜郎去、何日金鶏放赦回（我は愁う遠謫夜郎に去るを、何れの日か金鶏放赦して回らん）」（「流夜郎贈辛判官」詩）を踏まえる。其の一と同じくホトトギスの啼く声を聞いてからの発想であり、このホトトギスはあまりの悲しみのためにすでに血の涙を流し尽くしたが、いつの日にか天下に大赦が行なわれ、この身の罪が赦されるのか、というやや絶望的な心情を表現している。次に其の三。

命輕人鮓甕頭船　日瘦鬼門關外天　　命は軽し　人鮓甕頭の船、日は瘦す　鬼門関外の天。
北人墮淚南人笑　青壁無梯聞杜鵑　　北人　涙を堕せば　南人笑ふ、青壁梯無く杜鵑を聞く。

詩中の鮓甕頭（現湖北省秭帰県の西郊）は三峡のなかにある船の難所を指し、溺れた人が鮓詰めになると比喩される。鬼門関はあまりに遠くて、その上の太陽は痩せるように見える。しかし、このような険しい場所でも現地の人は平気に笑って暮らすが、北から初めてここに来れば涙を流すばかりで、その前途も見えないところにホトトギスの鳴き声（不如帰去）が耳に届く。ここは劉禹錫の「竹枝詞九首」其の一「南人上來歌一曲、北人莫上動鄉情」（南人上り来りて歌一曲、北人上る莫く郷情を動かす）を意識している。環境・風俗の大きな隔たりによる恐怖と孤独感、郷愁そして朝廷への名残り惜しさが主人公の心に湧き上がってくる。以上のように、黄庭堅の「竹枝詞」には彼の左遷行への辛い思いが強く反映されているのである。

二　歌としての竹枝詞

黄庭堅は竹枝詞を作ったきっかけについて、前掲の「竹枝詞二首」の跋文で次のように述べている。

予自荊州上峽入黔中、備嘗山川險阻。因作二疊、傳與巴娘、令以竹枝歌之。前一疊可和云、鬼門關外莫言遠、五十三驛是皇州。後一疊可和云、鬼門關外莫言遠、四海一家皆弟兄。

予　荊州より峡を上り黔中に入り、備に山川の険阻を嘗む。因りて二疊を作り、巴娘に伝与し、「竹枝」を以て之を歌はしむ。前の一疊は、和して「鬼門関外莫言遠、五十三駅是皇州」と云ふべし。後の一疊は、和し

て「鬼門関外莫言遠、四海一家皆弟兄」と云ふべし。　（「跋竹枝詞二首」『山谷詩集注』巻十二）

黄庭堅は荊州から三峡に遡って黔州に行く途中、「竹枝詞」二首を作り、後に巴娘（黔州の若い歌妓）に現地の「竹枝歌」の詠じ方に従って詠わせたという。その具体的な「畳」の歌い方は現在には伝わらないが、「竹枝詞」が歌詞として認識されていたことは間違いないだろう。更に例を挙げる。

荔子陰成棠棣愛　竹枝歌是去思謡　　荔子陰は棠棣の愛に成り、竹枝歌は是れ去思の謡なり。

（「送曹黔南口號」『山谷外集詩注』巻十七）

これは黔州滞在中の詩句であり、この曹黔南が書いた「竹枝歌」は、「去思」すなわち郷愁を表した歌であるという。ここからは「竹枝詞」という名称から、歌のある種の性質が導かれていることがわかる。

黔州に到着した紹聖二年、黄庭堅はさらに二首の「竹枝詞」を詠んでいる。

三峡猿聲淚欲流　夔州竹枝解人愁　　三峡の猿声　涙流れんと欲し、夔州の竹枝　人の愁ひを解く。
渠儂自有回天力　不學垂楊繞指柔　　渠儂自ら回天の力有り、学ばず　垂楊の指を繞りて柔らかきを。

（「竹枝詞二首」其一『山谷別集詩注』巻一）

三峡の猿の啼く声を聞き、人は涙を流すほど物寂しく感じる。夔州（現重慶市奉節県）の「竹枝詞」はその哀愁を解くことができる。その歌は天地を回転させるほどの力を持ち、柔弱な柳のようではない。この「垂楊」も双関語であり、柳の意味と同時に歌曲の「楊柳枝」のことを指す。[8]

塞上柳枝且莫歌　夔州竹枝奈愁何　　塞上の柳枝　且く歌ふ莫かれ、夔州の竹枝　愁を奈何せん。
虚心相待莫相誤　歲寒望君一來過　　虚心　相待ちて相誤つ莫れ、歲寒に君の一たび来過するを望む。

（「竹枝詞二首」其二『山谷詩別集』巻一）

この作も「竹枝詞」と「楊柳枝」の比較である。「楊柳枝」を歌わず、「竹枝詞」こそが哀愁を解くことができることを述べる。私は竹のように虚心で君と付き合い、そして竹のような気骨を持って君の来訪を待っている。第三・四句において竹を連想させる表現を用いるのも「竹枝詞」の「竹」の文字からの着想である。この内容は、左遷された元祐旧党の他の同志たちを心配したものだと推察される。

ところで、第一首では「竹枝詞」について「楊柳枝」よりも力があり柔軟な性質ではないとの評価を与えている。これは「竹枝詞」の曲調に根ざした発言である可能性が高い。例えば劉禹錫の「竹枝詞九首」の序にも、

　聆其音、中黄鐘之羽、卒章激訐如呉聲。

　　其の音を聆けば、黄鐘の羽に中たり、卒章は激訐として呉声の如し。

と「竹枝詞」の声調に注目していることからも窺われる。「黄鐘の羽」は平穏な中に激しい声調を有するものであり、「卒章激訐」も竹枝詞の終末部の音の激しさを指している。黄庭堅の「竹枝詞」も唐代のそれと同じく、激昂の音調という性質を保持していたのではなかろうか。

しかしながら、それは音楽としての音調であり、文字としての流れはどのように築き上げられたのであろうか。例えば、言葉の重複は重要な要素の一つであろう。「鬼門關外莫言遠、五十三驛是皇州」と「鬼門關外莫言遠、四海一家皆弟兄」とを見ると、第一首の第三句は同じく第二首の第三句にそのまま踏襲されている。また「杜鵑無血可續淚」「青壁無梯聞杜鵑」のように杜鵑が頻出したり、「夔州竹枝解人愁」「夔州竹枝奈愁何」は表現が近似するなど、文字の重複によってメロディーを築こうとした努力も窺われる。いずれも劉禹錫の「竹枝詞九首」其の六・其の七の第三・四句「懊惱人心不如石、少時東去復西來（懊悩す人心は石に如かず、少時は東に去きて復た西に来るを）」及び「長恨人心不如水、等閒平地起波瀾（長く恨む人心は水に如かず、等閒に平地に波瀾を起こすを）」に倣ったのであろう。このような文字による音律の構成は、彼の後年の作品、とりわけ七言絶句の連作の中にも継続して見られる。例えば「病來十日不舉酒二首」（『山谷詩集注』巻十八）に、次のように見える。

　病來十日不舉酒　回施青春與後生　　病来十日　酒を挙げず、青春を回施して後生に与へん。
　滿袖東風愜人意　見君詩與字俱清　　満袖の東風　人の意に愜ふ、君が詩と字の倶に清きを見ればなり。

　病來十日不舉酒　獨卧南牀春草生　　病来十日　酒を挙げず、独り南床に臥して　春草生ず。
　承君折送袁家紫　令我興發郎官清　　君が袁家紫を折り送るを承け、我をして興を郎官清に発せしむ。

後篇の第二句は謝霊運の「池塘生春草」（「登池上樓」詩）を意識する句であり、兄弟愛の詩であろう。私は病気

になってから十日間酒を飲まずにいるが、このような辛い生活の中で君の詩と書蹟を見て、私は心地よくなった。また、私は病気中で酒を飲めないが、君が牡丹（袁家紫）を送ってきたので、私はあまりにうれしくて、酒を飲める気がしてきた。このように「病來十日不舉酒」句が一字も変えられることもなく二詩の首句に配置されることで、詩巻や牡丹を受け取った心情を際だたせている。また、「題王居士所藏王友畫桃杏花二首」（『山谷外集詩注』巻七）には次のように詠われている。

凌雲一笑見桃花　三十年來始到家
從此春風春雨後　亂隨流水到天涯

凌雲一笑して桃花を見、三十年来　始めて家に到る。
此れより春風春雨の後、乱れて流水に随ひて天涯に至らん。

凌雲見桃萬事無　我見杏花心亦如
從此華山圖籍上　更添潘閬倒騎驢

凌雲　桃を見て万事無し、我　杏花を見て心も亦如たり。
此れより華山図籍の上、更に潘閬の倒に驢に騎るを添へん。

其一は王朴居士の所蔵する絵の桃花を見て、三十年間悟らなっかたが、いまようやく「拈華微笑」のように悟った。これから、桃花の花ひらのように、水に任せて天涯に行き、執着がなくなった。これは白居易の「歸去誠可憐、天涯住亦得（帰り去くは誠に憐れむべきなるも、天涯住するも亦た得たり）」（「委順」詩）を意識したのであろう。其二も杏花を見て悟ったことを述べる。私はこれから、宋初の詩人潘閬のように、驢馬の歩に任せて、どこへ行っても構わない、自由自在の生活を送りたい、と詠嘆する。ここでの「凌雲一笑見桃花」と「凌雲見桃萬事無」、「從此春風春雨後」と「從此華山圖籍上」との構造は非常に近く、字句の音律を強く意識している。

また、「戲詠零陵李宗古居士家馴鷓鴣二首」（『山谷詩集注』巻二十）では次のように述べる。

山雌之弟竹雞兄　乍入雕籠便不驚
此鳥爲公行不得　報晴報雨總同聲

山雌の弟　竹雞の兄、乍ち雕籠に入りて　便ち驚かず、
此の鳥　公の行くを得ざるが為に、晴を報じ雨を報じて総て同声。

眞人夢出大槐宮　萬里蒼梧一洗空
終日憂兄行不得　鷓鴣應是鼻亭公

真人　夢に大槐宮に出で、万里の蒼梧　一洗して空し。
終日兄の行くを得ざるを憂ひ、鷓鴣は応に是れ鼻亭公なるべし。

鷓鴣の鳴く声は「行不得也哥哥」の音に近く、おのずと旅の苦労を連想しやすい。この鳥は君の旅を心配するために、雨でも晴れでも毎日ひたすら「行不得」と鳴いている。其二は零陵に上古の舜と鼻亭公に封じられた弟の象を連想している。兄の舜は遠く万里の蒼梧まで視察に行きそこで崩じた。「行不得」と鳴く鷓鴣は当然弟の象でなければならないという。其一の第三句「此鳥爲公行不得」と其二の第三句「終日憂兄行不得」とはまた非常に近似した構造である。このように、詩全体は遊戯性を持ち、旅人を憂う鷓鴣の姿が印象深く描写される。また、「四休居士詩」（『山谷詩集注』巻十九）其二と其三を見てみよう。

無求不著看人面　有酒可以留人嬉　　求むる無く著せず　人面を看るを、酒有らば以て人を留めて嬉ぶ可し。
欲知四休安樂法　聽取山谷老人詩　　四休安楽の法を知らんと欲せば、聴取せよ　山谷老人の詩を。

一病能惱安樂性　四病長作一生愁　　一病能く安楽の性を悩ます、四病　長く一生の愁を作す。
借問四休何所好　不令一點上眉頭　　借問す　四休　何れか好き所ぞ、一点をして眉頭に上らしめず。

黄庭堅の序によれば、「四休」は「麤茶淡飯飽即休、補破遮寒暖即休、三平二滿過即休、不貪不妬老即休（粗茶淡飯飽かば即ち休す、破れたるを補ひ寒きを遮ぎ暖ければ即ち休す、三平二満過ぐれば即ち休す、貪らず妬まず老いては即ち休す）」と説明されている。其二は「看人面」「留人嬉」と比較的近い言い方で、さらに「老人詩」と「人」の字が重複して用いられる。其三の「一病」「一生」「一點」も構造的には類似している。そして、其二の第三句「欲知四休安樂法」と其三の第三句「借問四休何所好」とは表現が極めて近く、「四休」の内容及びその効果（不令一點上眉頭）を強調している。

黄庭堅の黔州左遷後の七言絶句連作は「竹枝詞」のほかに三十五組ある。その中には前述のように重複の文を含む詩が五組あり、全体の七分の一を占めている。このような作詩技法は左遷される以前の作品には殆ど見られない特徴である。この変化に注目すれば、「歌」の意識や技法が「竹枝詞」から七言絶句連作へと浸透していたと考えられる。

三　劉禹錫「竹枝詞九首」への評価と黄庭堅の晩年詞

黄庭堅の文集には劉禹錫の「竹枝詞」に関する記録が四篇残されている。すなわち「書劉禹錫浪淘沙、竹枝歌、楊柳枝詞各九首、因跋其後」（『黄庭堅全集』別集巻七）、「跋竹枝歌」（『黄庭堅全集』別集巻八）、「跋劉夢得竹枝歌」（『黄庭堅全集』正集巻二十五）及び「又書自草竹枝歌後」（『黄庭堅全集』別集巻八）がそれである。以下、これらの記録を通して、黄庭堅の劉禹錫「竹枝詞」に対する読解法及び受容について幾つかの検討を試みたい。

まず黄庭堅は、劉禹錫「竹枝詞九首」の「風声気俗」に対して特別な関心を示している。

劉夢得作竹枝歌九章。余從容夔州、歌之、風聲氣俗、皆可想見。

（「跋竹枝歌」）

劉夢得「竹枝歌」九章を作る。余夔州に従容たるとき、之れを歌ふに、風声気俗、皆想見す可し。

「風声気俗」とは換言すればその土地の風俗であり、「竹枝詞」に描かれる表現に関心があったと推察される。

山上層層桃李花　雲間煙火是人家
銀釧金釵來負水　長刀短笠去燒畬

山上　層層たる　桃李の花、雲間の煙火　是れ人家。
銀釧金釵　来たりて水を負ひ、長刀短笠　去きて畬を焼く。

（劉禹錫「竹枝詞九首」其九）

劉禹錫が当地特有の風俗の一環として労働の様子を描写した作品である。第一・二句では、山上では桃や李の花が咲き乱れ、人家が煙の中に隠れていると美しい景色を描写する。第三・四句はその他の人々の働く姿を描写する。金銀の腕輪や髪飾りをまとった女性が水を背負って山を登って来たり、長い刀をさし短い笠をかぶった男性が春の畑を野焼きに行く。これに対して、黄庭堅にも黔州滞在中の詞作「木蘭花令」（『黄庭堅全集』正集巻十三）がある。

黔中士女遊晴晝　花信輕寒羅綺透
爭尋穿石道宜男　更買江魚雙貫柳
竹枝歌好移船就　依倚風光垂翠袖
滿傾蘆酒指摩圍　相守與郎如許壽

黔中の士女　晴昼に遊ぶ、花信軽寒なり　羅綺透く。
争いて穿石を尋ねて宜男を道ひ、更に江魚を買ひて双べて柳に貫く。
竹枝歌好く　船を移して就き、風光に依倚して翠袖を垂る。
蘆酒を満ち傾けて摩囲を指し、郎と許（か）くの如き寿を相守らん。

黔州の若い男女の可愛い活動を描写している。少年少女は晴れた日に遊びに行き、初春の冷たい風は少女の着物をなでる。少女は叢の中で宜男（ワスレグサ）を探す。宜男は忘憂草・萱草などとも言い、文字通り、憂愁（恋の悩み）を忘れるためであり、また、将来男の子を産みたいのだろう。さらに、川のほとりで魚を買い、柳の枝で魚を貫いて持って帰る。円転する「竹枝歌」に惹かれて、また舟を乗ってのんびりと歌を聞く。そして高大な摩囲山を眺め、心の中でその摩囲山のように恋人と永遠に一緒にいられるようにと願っている。西南の地の風俗の描写は、前述の劉禹錫の「竹枝詞九首」其九と非常に近い風格を持つと言えるだろう。また、「跋劉夢得竹枝歌」には次のように述べている。

劉夢得竹枝九章、詞意高妙、元和間誠可以獨歩。道風俗而不俚、追古昔而不愧。比之杜甫夔州歌、所謂同工而異曲也。東坡嘗聞余詠第一篇、歎曰、此奔軼絶塵、不可追也。

劉夢得の「竹枝」九章、詞意高妙なり、元和の間に誠に以て独歩となすべし。風俗を道ひて俚ならず、古昔を追ひて愧ぢず。之を杜甫の「夔州歌」に比ぶれば、所謂同工にして異曲なり。東坡嘗て余詠の第一篇を聞きて、歎じて曰く、「此れ奔軼絶塵にして、追ふ可からず」と。

ここで黄庭堅は劉禹錫の「竹枝詞」について、劉禹錫の「竹枝詞」は元和年間の独歩であり、「道風俗而不俚、追古昔而不愧」と高く評価し、その絶妙さは蘇軾も讃歎したと言っている。

ここで再び「風俗」に注目したい。黄庭堅の住まいは黔州の摩囲山の付近であったため、号を「摩囲老人」と称した。ここから彼の西南地域に対する意識が感じられる。前述のように彼の「竹枝詞」が頻繁に地名を用いて三峡の艱難を描写していることも、風俗の一部分と言えるだろう。事実、黄庭堅の詞には「摩囲山」や「黔」字が高い頻度であらわれる。もう一首例を示そう。

萬里黔中一漏天　　万里の黔中　一漏の天、
屋居終日似乘船　　屋居終日　乗船に似たり。
及至重陽天也霽　催醉　　重陽に及至して天もまた霽れたり、醉ふを催す。
鬼門關外蜀江前　　鬼門関の外　蜀江の前。

莫笑老翁猶氣岸　君看　老翁猶ほ気岸あるを笑ふ莫かれ、君看よ、
幾人黄菊上華顛　幾人の黄菊か　華顛に上らん。
戲馬臺南追兩謝　馳射　戲馬台の南　両謝を追ふ。馳射せん。
風流猶拍古人肩　風流にして　猶ほ古人の肩を拍つ。　（「定風波」『黄庭堅全集』正集巻十三）

雨が長く続くので、周囲は水で溢れ、部屋にこもると船に乗ったかのように感じられる。蘇軾は「烏台詩案」で黄州に左遷され、その間に「黄州寒食詩」を創作しており、黄庭堅は彼の「小屋如漁舟、茫茫水雲裏（小屋漁舟の如き、茫茫たり水雲の裏）」という長雨の描写を意識したと思われる。しかし、重陽の日には天が恩を施したのか、雨がやんだ。黄庭堅は酒を飲み、菊を白髪に挿し、馬に乗るが、このような風流な行動は、六朝宋の謝霊運と謝瞻が重陽節に同じ詩題で詩を作ったことに倣ったものである。もちろん、黔中、鬼門関、蜀江という黔州の地名で左遷の雰囲気を暗示しているが、その雰囲気の中でも、あえて酒を飲み花を白髪に挿すことで一層詩人の楽観的な心情を表現することに成功している。左遷地の「風俗」への関心は黄庭堅の詞において、新たな一面をもたらしていると考えられる。

黄庭堅による劉禹錫の「竹枝詞九首」に対する評価は、この他にも見出すことができる。「又書自草竹枝歌後」（『山谷別集』巻十二）である。

劉夢得竹枝九篇、蓋詩人中工道人意中事者也。使白居易、張籍爲之、未必能也。

劉夢得の「竹枝」九篇、蓋し詩人の中、工（たく）みに人意中の事を道ふ者なり。白居易、張籍をして之を為さしむも、未だ必ずしも能はざるなり。

劉禹錫の「竹枝詞九首」のもう一つの特徴は、人が心の中に抱く思いをうまく表出させたことであり、当時の大詩人白居易や張籍も彼に及ばないと述べる。黄庭堅の劉禹錫「竹枝詞九首」に対するもう一つの注目点が「工道人意中事」である。この言葉は黔州を離れ次に左遷された戎州での「醉落魄の序」（『黄庭堅全集』正集巻十三）にも見える。

因戲作四篇、呈吳元祥・黄中行、似能厭道二公意中事。

因りて戯れに四篇を作り、呉元祥・黄中行に呈し、能く二公の意中の事を厭ひ道ふに似たり。

呉元祥・黄中行の二人については未詳であるが、「醉落魄」四篇を作ることで彼らの鬱屈した心中を明かにしたと述べており、黄庭堅の自信が伝わってくる。其一を挙げる。

陶陶兀兀　尊前是我華胥國　　陶陶たり　兀兀たり、尊前是れ我が華胥の国。
争名争利休休莫　　名を争ひ　利を争ふこと、休休莫せよ。
雪月風花　不醉怎生得　　雪月風花　醉はずして怎生に得ん。
邯鄲一枕誰憂樂　　邯鄲の一枕　誰か憂楽せる。
新詩新事因閒適　　新詩　新事　閒適に因り、
東山小妓攜絲竹　　東山の小妓　糸竹を携ふ。
家裏樂天　村裏謝安石　　家裏の楽天か　村裏の謝安石なるか。

冒頭の「陶陶兀兀」とは『晋書』劉伶伝の「雖陶兀昏放、而機應不差（陶兀昏放たりと雖も、機応差はず）」に基づく。私は劉伶のように酒を飲んで、ぼんやりした中に日々の生活を楽しんでいる。飲酒は私にとって理想郷である。世の中の名利を争うことに意味はない。雪月風花の美を享受するには、これが一番なのである。人生の楽しみも悲しみも邯鄲の一夢のように短い。のんびりと白居易のように閑適詩を書き、謝安のように歌妓の奏でる音楽に耳を傾けるべきだ。世事を放擲してお酒を心ゆくまで飲めと勧めている。この内容は劉禹錫「竹枝詞」の内容と大きく異なるものの、人生を謳歌しようとする点においては共通していると言えよう。劉禹錫「竹枝詞九首」其七に、次のようにある。

瞿塘嘈嘈十二灘　此中道路古來難　　瞿塘嘈嘈たり　十二灘、此中の道路　古来難し。
長恨人心不如水　等閑平地起波瀾　　長く恨む　人心は水に如かず、等閑に平地に波瀾を起こすを。

ここでは世の中の険しさを嘆く。これは其一の「争名争利休休莫、雪月風花、不醉怎生得」に同じく、世情に対する慨嘆であろう。なお、黄庭堅の詞「鷓鴣天・西塞山邊白鷺飛」の末二句「人間底是無波處、一日風波十二時（人間底ぞ是れ波無き処あらん、一日の風波十二時）」は間違いなく劉禹錫のこの「長恨人心不如水、等閑平地起波瀾」

句を意識したものである。このほか、彼は後に戎州に左遷された期間に、「跋馬忠玉詩曲字」という文章を作っている。

馬忠玉翰墨、頗有勁氣、似李西臺、但少妍耳。……至其作樂府長短句、能道人意中事、宛轉愁切、自是佳作。

馬忠玉の翰墨、頗る勁気有り、李西台に似、但だ妍を少くするのみ。……其の楽府長短句を作るに至りしては、能く人の意中の事を道ひ、宛轉愁切にして、自ら是れ佳作なり。

（「跋馬忠玉書詩曲字」『黄庭堅全集』別集巻十二）

ここではやはり黄庭堅は友人馬忠玉の詞を「能道人意中事」という言葉で高く評価するのである。

黄庭堅は友人の晏幾道のための「小山詞序」（『黄庭堅全集』正集巻十五）で、

余少時間作樂府、以使酒玩世。道人法秀獨罪余以筆墨勸淫、於我法中當下犁舌之獄。

余　少き時　間に楽府を作りて、以て酒を使ひ世を玩ぶ。道人法秀独り余の筆墨を以て淫を勧むるを罪し、我を法の中に於いて当に犁舌の獄に下るべしとせり。

と青年時代の艶詞を法秀から叱責されたことを回顧している。黄庭堅の詞集には現在も青年期の艶詞を容易に見出すことができる。ところが、黄庭堅は元豊七年（一〇八四）に泗州の僧伽塔で「発願文」を書き、酒色と肉食を断つ誓いを立てる。そして元祐四年（一〇八九）には、詩詞唱和の重要な相手であった蘇軾が都開封を離れて杭州に出守し、また黄庭堅自身も眼病を罹い、さらに元祐六年（一〇九一）には母が死去し、彼は三年間の服喪に入ったために詩詞創作の筆を断った。そして、その三年の服喪期を終えて間もなく、黔州に左遷されたのである。左遷地で最初の詩こそが本稿に挙げた「竹枝詞二首」なのであった。

あらためて黄庭堅の黔州時代三年間の詩と詞の数量を見てみよう。詩は二十一首で、現存する一八七八首のわずか一パーセントである。これに対し詞は二十九首で、現存する詞約一九〇首の約十五パーセントを占めている。もし前述の七首の「竹枝詞」を詞として算入すればその比率の差は更に大きくなる。[10] このことから、黔州滞在中の黄庭堅は、詞に対する興味が特に深かったといえる。

黄庭堅は劉禹錫「竹枝詞九首」に最上の敬意を払い、現地の風俗の描写や内面にひそむ自らの心の声を表出させていること（道人意中事）に深く感銘を受けた。そして「竹枝詞」七首の中で、この「風俗」と「道人意中事」と

を自らの創作の指針としたのである。すなわち、劉禹錫「竹枝詞九首」への評価を契機として黄庭堅は「竹枝詞」を製作し、それによって、黔州左遷以降の文学活動の新たな一面を見つけ出したと言えるのである。

四　竹枝詞と地域

これまでに見てきたように、黄庭堅の「竹枝詞」は地域的色彩を強く持った作品群である。黄庭堅は黔州に赴いて、現地の歌謡を聞き、唐代の劉禹錫を手本として「竹枝詞」を創作した。つまり、「竹枝詞」の創作と「黔州」という土地は、密切に関連しており、「地域の変化」はその重要な一要素となりうるのである。

例えば、黔州滞在期間、黄庭堅には『白氏文集』の巻十と巻十一の詩を節録或いは改変した「謫居黔南十首」という一連の詩作がある。白居易の原詩は主に忠州（現重慶市忠県）に左遷されていた時期の作品であり、忠州は黄庭堅の左遷地黔州とはわずか一〇〇キロメートルほどしか離れていない。左遷という境遇と、実際の左遷地が近いということから、黄庭堅は白居易の忠州詩を強く意識していたと思われる。同じように、地域としての忠州や黔南は、その創作活動おいても重要な要素を占めている。黄庭堅はその地を実際に訪れたであろう古人と心の中で会話し、その上でその場所で作った古人の詩を意識している様子が窺われる。例として哲宗の元符三年（一一〇〇）戎州左遷時に書いた「與王觀復書」を見てみよう。

觀杜子美到夔州後詩、韓退之自潮州還朝後文章、皆不煩繩削而自合矣。
杜子美の夔州に到りて後の詩、韓退之の潮州より朝に還れる後の文章を観るに、皆繩削に煩わされずして自ら合せり。
（「與王觀復書」『黄庭堅全集』正集巻十九）

杜甫の夔州での詩と、韓愈の潮州での作品と繋げていることからも明らかなように、黄庭堅は古人の創作活動を土地に結びつけて考えているのである。さらに二つの例を挙げる。

自予謫居黔州、欲屬一奇士而有力者、盡刻杜子美東西川及夔州詩、使大雅之音久湮没而復盈三巴之耳。
予黔州に謫居せしより、一奇士の力有る者に属して、尽く杜子美の東西川及び夔州の詩を刻し、大雅の音の

久しく湮没せしものをして復た之を三巴に盈たさんと欲す。　（「刻杜子美巴蜀詩序」『山谷集』巻十六）

丹棱楊素翁、英偉人也。……聞余欲盡書杜子美兩川夔峽諸詩、刻石藏蜀中好文喜事之家。素翁粲然向余請從事焉。丹棱楊素翁、英偉の人なり。余尽く杜子美の両川夔峽の諸詩を書し、石に刻みて蜀中の好文喜事の家に蔵せしめんと欲すを聞く。素翁粲然として余に向ひて従事するを請ふ。（「大雅堂記」『黄庭堅全集』正集巻十六）

黄庭堅は杜甫の巴蜀詩を全部書写したことから、黄庭堅は杜甫の巴蜀詩を特に好み、「大雅の音」つまり理想的な詩として尊重していたことが読み取れる。そして黔州での黄庭堅は、劉禹錫や白居易や杜甫の詩を特に重要視した。このような彼自身の強い意識は彼の詩風の変化にも強い影響を及ぼしたであろう。本稿では、その中でも特に「竹枝詞」を手がかりとして、黔州という地を契機とした黄庭堅の詩風（詞風）の変化を論じた。左遷期間の詩を研究するには、本稿が試みたように地域の情況や作者の心態の変化に着目することは大変重要である。黄庭堅の詩風の変化と左遷地との関連を今後も堀り下げてゆきたい[11]。

注

（1）黄庭堅は元祐元年（一〇八六）から元祐六年（一〇九一）にかけて都の開封で『神宗実録』の編纂に参与していた。

（2）加藤国安「杜甫と竹枝歌」（『文化』東北大学、四三巻一・二号（秋夏）参照。なお、清代の詞譜『歴代詩餘』『欽定詞譜』『詞律』などによれば、竹枝詞は十四字二句で押韻が二平韻または二仄韻のものも存在した。

（3）黄庭堅の詩は『黄庭堅詩集注』（二〇〇七年、中華書局）を参照、本書には『山谷詩集注』『山谷外集詩注』『山谷別集詩注』『黄庭堅詩集補遺』の四つの部分がある。文と詞は『黄庭堅全集』（二〇〇一年、四川大学出版社）を参照、該書は正集、外集、別集、続集、補遺の五つの部分から構成される。

（4）鬼門は死者の門の意。任淵の『山谷詩集注』によると、峽州（現湖北省宜昌市）にあった関所の名。蛇倒退・胡孫愁の具体的な場所は不詳であるが、范成大が巴東で作った詩に「蛇倒退」「胡孫愁」の詩があり、湖北省恩施市と重慶市彭水県間の一帯であると推測される。これらは何れも三峽地帯から黔州に至るまでの道中の地名である。

（5）『劉禹錫全集編年校注』（陶敏・陶紅雨校注、二〇〇三年、岳麓書社）巻五。

（6）浅見洋二「『夢中得句』をめぐって」（同氏著『中国の詩学認識』、創文社、二〇〇八年、その五八九～六一五頁参照。

（7）例えば、北宋前期の柳永に「聽杜宇聲聲、勸人不如歸去」（「安公子」）とある。

（8）「楊柳枝」は唐の教坊曲。もと楽府の横吹曲に「楊柳枝」があり、この古い曲名に借りた新たなメロディである。村上哲見「楊柳枝考」（『宋詞研究・南宋編』二〇〇六年、創文社）参照。白居易、劉禹錫などに作がある。

（9）「九日從宋公戲馬台集送孔令」詩、『文選』巻二十所収。

（10）七言絶句の平仄と常に同じである竹枝詞は、黄庭堅の詩集に収められるが、歌或いは詞の性質を持つ曖昧な詩体である。実は清代の詞譜（『歴代詩餘』『欽定詞譜』『詞律』など）にも「竹枝」を収録して、詞と見なしている。

（11）黄庭堅晩年の詩風については、莫礪鋒「論黄庭堅詩歌創作的三個階段」（『文学遺産』一九九五年第三期）参照。晩年の黄庭堅は壮年時代とは異なり、独特な詩風を形成していたことが論及されている。